



教娘
草節
女房
形用
氣

全

昭和十年八月十日印刷
昭和十年八月十四日發行

有朋堂 文庫
娘節用・教草女房形氣

(非賣品)

編輯者

塚 本 哲 三

東京市淀橋區西大久保町二丁目二百三十六番地

印刷者兼
發行者

株式會社 有朋堂
代表者
三 浦 正

東京市神田區錦町三丁目廿二番地ノ二

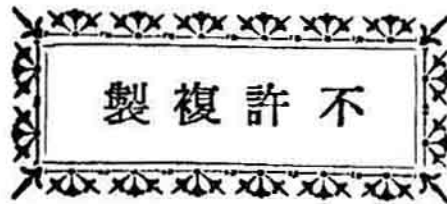
印刷所

合資會社 有朋印刷社

東京市神田區錦町一丁目七番地ノ一

發行所

株式會社 有朋堂



不許複製

緒言

娘節用三編九卷は曲山人の筆に成り、人情本中最も出色あるものの一に居る。曲山人の傳は未だ世に詳ならずと雖も、其脚色の比較的自然而して、よく當時の世相を寫せるが如き、又その描寫の清新にして、人物の個性を表現せるに近き等より觀るに、蓋し當時の隠れたる一大作者たりしを疑はず。本書は他の人情本と等しく、事多く狹斜花柳の巷に關すれども、其ヒロインとして捉し來れる小三といひ、又其姉眞名鶴の如き、金五郎の妻お雪の如き、何れも當時の社會道德よりすれば、所謂烈女貞婦の鑑にして、彼の徒に淫靡蕩奢の風を寫し、以て無學者流の低級趣味に投ぜんとしたる滔々たる人情本とは、自ら其選を殊にすと稱すべし。文亦流麗滑達、よく情景に伴へり。殊に小三の遺書の如き、寔に人情の極美を現し、讀者をして思はず涙潸然たるものあらしむ。

女房形氣は草雙紙の合卷と稱するものにして、其二十五編中、一編より十九編迄は山東京山の作に係り、其餘は鶴亭秀賀の補訂又は述作に成る。第一編の稿成りしは弘化二年の夏にし

て、第十九編の稿は安政五年京山九十歳の四月に成り、その間實に十四年の久しきを歴て續刊せられたるもの也。而して京山の死は十九編稿成るの九月、その發兌は翌年の春なるを以て、嚴格の意味よりいへば、十九編は彼の遺稿と稱すべく、二十編は其草稿を採りて秀賀の補訂せる所なるべきか。原本十九編に京山九十一歳と署し、二十編以下最初一二編の緒言に京山の遺艸と稱するものは、蓋し前作の情力を利用し、以て從來の好評を持續せんとせる書估の一手段に過ぎざるべきか。二十五編の緒言には、更に二十六編の刊行を豫告せりと雖も、未だその版本の世に流布するものあるを見ず。京山は京傳の弟にして、戲作者の第二流に位する者、秀賀は更に下りて、其傳亦明確ならず。されば本書が同種の小説たる田舎源氏の如きに比して遙かに遜色あるは固よりなれども、亦よく當時の時好に投じ、多大の好評を博したるものの一なる事論を俟たず。本書の如き合卷の類は、讀み本、人情本、洒落本の類と異なり、毎葉悉く畫にして、文句は寧ろ其畫の解説とも稱すべく、文と畫と相俟つて始めて其趣を爲せるもの也。されば此種の覆刻は、本文庫黃表紙の如く、全部寫眞製版となすを

最良の法となせども、甚しく浩瀚にして、到底その理想を實現し得べくもあらず。されば今本文庫に收むるに當りては、或は表紙の繪、或は表紙裏の繪、或は前書きの繪、或は本文の繪等、各方面に涉り、成るべく畫面の多趣にして原本の面影を偲ぶに足るべきもの若干を添へたり。

以上の二書を併刊するに際し、娘節用は假名遣を統一し、會話に鉤識を施したる外、用字句讀等概ね原本のまゝにして、甚しく意義の通達を害するものの外、敢て改訂を加へず。女房形氣は原文殆んど總假名にして句讀なし、よりて意義の上より努めて平正の漢字を配し、句讀を施し、會話には鉤識を加へ、以て閲讀に便じたり。本書の校訂校正は主ら星野亮太郎氏の力に頼る。茲に特記して深謝の意を表す。

大正三年五月

校訂者 塚 本 哲 三

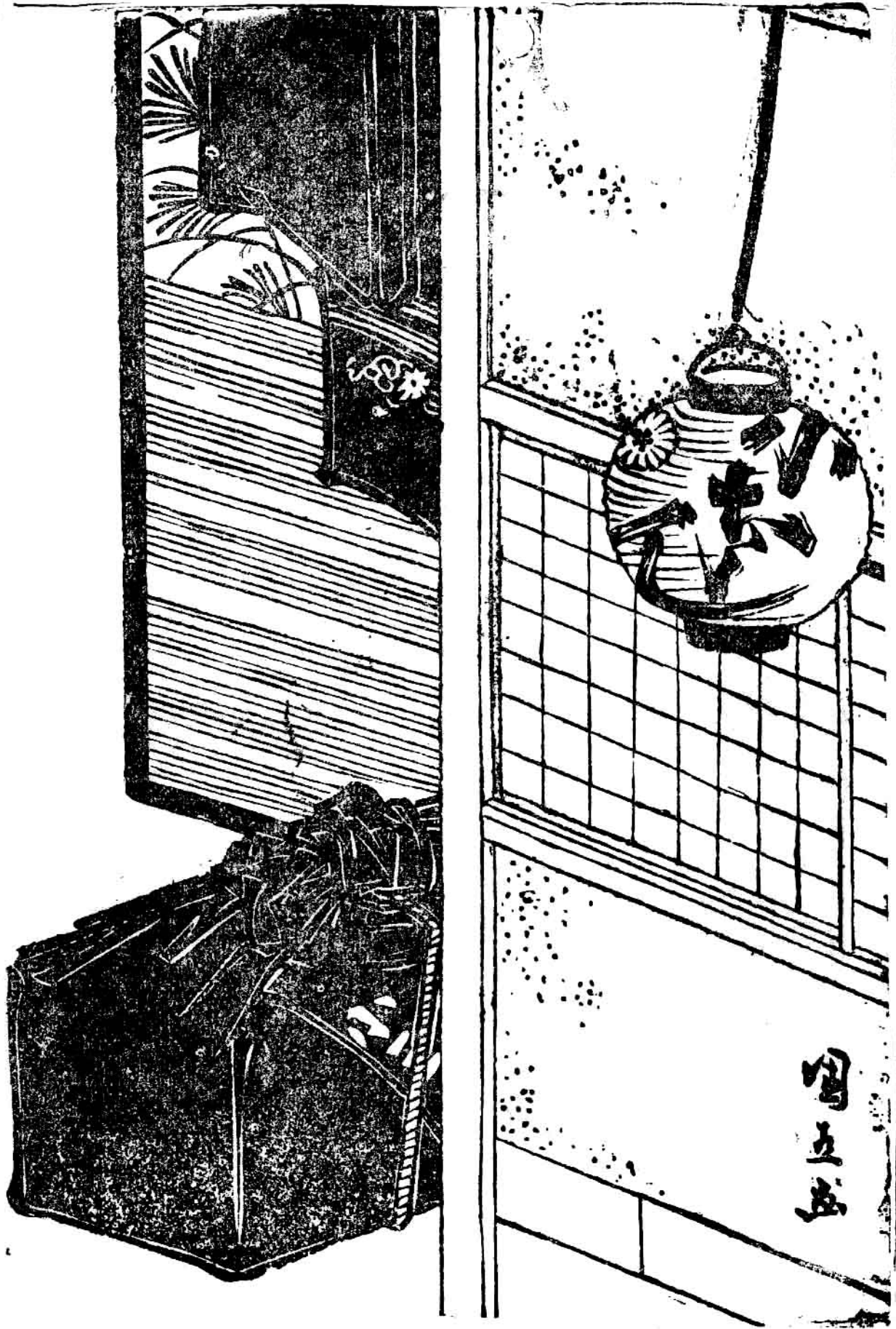
そもく男女のなからひは、八百萬の神達の、出雲の御社に群つどひて、結ぶえにしのさ
まざまなる、竈の前の三介が、相摸出生のおさん殿と、物置の出合の國訛、片言まじりの
口説事、寡婦と養子の芋田樂、喰はぬは損者のびんづる隠居が、むしろやぶりの女ぐるひ、
あるは帶屋の長右衛門が、老實をして筥入の、お半の壺へくらひ込み、浮名を桂川に流せ
しも、皆ことく縁なるべし。こゝにあらはす一部の冊子は、いかなる人の筆に稿けむ、
小三金五郎が一期の奇譚を、いと長々しく綴りたるを、書肆のもて來て、補ひてよと、需
にしたがひ、をこがましくも、いさよかこれに筆を加へて、櫻木に壽くこととはなりぬ。

文政拾四年辛卯孟陽

江戸 文盲短齊しるす







四

小三 金五郎 假名文章娘節用

江戸 曲山人補綴

前編上卷

ほつたん

太刀は大山石尊の、さよけ物に納れば、長刀はひやめしの、草履にその名を止めたり、弓は矢場のあねさんが、活業の助となれる静けき御代のことになん、斯波家の藩中に、假名家文字之進といへる者あり、二人の男子ありけるが、兄は文之丞と云ひ、弟は文次郎と喚なして、兩人ともに文武の道を、常にはけみて勤めしが、兄文之丞はいつしかに、奥づとめの御側玉章といへる、容貌よき女と人しれず、契をこめて語らひしが、日にまし互に思ひつゝのりて、しのびくの密話に、玉章はいつか只ならぬ、懷妊の身となりけるにぞ、この事今にも現れなば、とても添ふ事なりがたし、とおもへば二人ひそかに語らひ、ある夜館を忍び出で、すこしのしるべを

便たよりにして、難波なにはをさしてのほりつゝ、彼地かなたこなた此方こなたとさまよひて、おもはしからぬ日を送おくれば、この地ちにをりても要えうなきことと、夫それより皇都みやこへおもむきて、三すぢ町まちのほとりに、さよやかなる家を借りて、學文劍法がくもんけんぽうの指南しなんをしつ、月日つきひをこゝにおくりしが、もとよりその技わざに勝すぐれたれば、些ちわづかのうちに弟子でしの、あまた付ついて繁昌はんじやうしければ、おのづから金銀きんぎんの、融通ゆうつうもよければ、些ちづつの金かねを人に貸かしなどして、その利きを取りて不足ふそくなく、暮くらす程ほどに月満つきみちて、妻つまはやすくゝと玉たまのごとき、男子うみだを産出うみだしければ、名なを金五郎きんごろうとよびなして、蝶てふよ花はなよと育そだつるうち、満みつれば缺かくる世よのならひ、妻つまは産後さんご肥立ひだたぬ上に、あしき風かぜを引ひそへて、醫療いれう手てをつくすといへども、その驗更けんさらになく、つひに無常むじやうの風ふうにさそはれ、冥途めいごの旅たびにおもむきぬ。文之丞ぶんのじやうはたよりに思おもふ、妻つまに別わかれて今いまさらに、かなしみやるかたなしといへども、いかんともすべきやうななければ、泣なくく野邊のべの送おくをなして、跡あとねんごろにとむらひけり。かよりし程ほどに幼兒をさなこを、乳ちちなくてはそのだてがたしと、乳母うはをかゝへ養育やういくさせ、只金五郎ただきんごろうを手うちの中の、玉たまの如ごとくにいとをしみて、光陰ついきんの過たつをかぞへけり。こゝにまた珠數屋町じゆずやまちに、古鐵買ふるかねかひの六兵衛べっさゐとて、夫婦ふうふかすかにくらす者あり、年としごろ子の無なかりしかば、つねに是こゝをふくなけき、神佛かみほとけにいのりしゆゑ、その信心しんくの通つうじたりけん、妻つまは今年四十歳ことしさいにあまりて、はじめて女子むすめを儲もけしかば、夫婦ふうふのよろこび大かた

ならず、名さへいはうてお鶴と號び、いつくしみそだつるうち、妻はふたよび妊身になりて、次の年また女子を産みぬ。しかるに今度は養生の、悪しかりしにや四十のうへの、年子の事ゆゑおのづから、血心おとろへ循環せざるや、惡血さへもおりかねて、あと腹のしきりにかぶり、そのなやみの堪へがたきと、心のつかれに養生かなはず、つひに空しくなりけり。こゝにおいて六兵衛は、子なきを神や佛にいのり、二人まで子をまうけしに、今はた思ひかけもなく、妻は子を捨て亡靈の、數に入りたる身の當惑に、なけくより外なかりしを、近所の者にいさめられ、まづ亡骸は取納めても、をさまりかねし胸のうちに、とやかく思ひつゞくれば、貧しきくらしに男の手一つ、いかゞして二人の子をば、そだてんやうもなかりしゆゑ、心を鬼とも蛇ともなし、藪へなと子を捨てんかと、思ふまでにくるしみて、一日々々とくらしけり。さるを假名家文之丞は、傳へ聞きておのが身に、引くらべては捨置きがたく、今不自由なくらすゆゑ、當歳の子を親しらずに、もらひうけて育てなば、その親の手もすこしはかろく、なりもやせんと人づてに、この事をいひ入れて、妹娘をもらひうけ、名をお龜となづけ、また幾許の金を六兵衛におくり、姉なる娘をはぐくみ給へ、と情ある深切に、六兵衛はいたくよろこび、むすめが行すゑふかく憑み、これより後、めぐまれし金を少々お鶴に添へて、さる家へ里につ

かはし、あぢきなき世をおくりけり。さればまた吾妻なる、假名家が家には文之丞が、不義なして家出せしかば、文字之進は怒りつくやみつ、にくからぬ忤といへども、世間のおもはく土への聞え、親の名を出す不孝の罪、打捨ててもおかねば、これ等の趣主君へ達し、文之丞を勘當なし、弟文次郎に家督をゆづり、嫁を迎へて是に娶合せ、その身は隠居し名を白翁と、あらためてくらすうち、文次郎夫婦の中に、一人の女兒を儲けけり。是につけても文字之進は、文之丞のことをりふしは、何かにつけてうち案じ、おもひ出しつゝほのかに聞くに、今は花洛に住馴れて、男子持ちて不足なく、くらすと人の風便ゆゑ、案じの胸もやすまりて、ゆくゝは文之丞が子を、文次郎が娘に娶合せ、家をゆづらば血すぢも絶えずと、心に思ひるたりけり。

第一回

されば月日に關守なくて、文之丞が一子金五郎は、今年十七歳、お龜は十五の春となりしが、二人ともに天性の美男美女にして、華洛廣しといへども、たぐひまれなる容顔は、梅と櫻の婀娜くらべ、おとらずまさぬ風情なり。文之丞はこのとしごろ、古郷をはなれ遠き都に、世をおくるそのうちも、二人まで子をまうけ、何不足なき身のうへにも、十年あまり過ぎしころ、鎌倉の家をぬけ出でて、父のところへ便さへ、ならねばいととなつかしく、子を持つて知る親

の恩、報じがたきをくちをし、おもふものから考へ見れば、主家の掟をやぶりつゝ、妻と不義して出奔せしかど、今にも詫のかなひなば、ふたよび主家へ立歸る、こともあらんとゆくすゑを、彼はおもひあはすにぞ、はやくより金五郎には、文學武術を教へしに、もとよりさかしきうまれゆゑ、一を聞いて萬を知る、文武の才に長けたれば、幾程もなく上達して、今ははや金五郎は、武士の道くらからず、殊に和歌、連俳、茶の湯、插花のたぐひまで、人なみくより勝れたる、よき壯士とはなりにけり。お龜もまた世にめづらしき、發明のうまれにて、文よみ歌よみ手ならふ道はさらなり、物たち縫針の技藝にすぐれ、琴三味せんの調さへ、いとうつくしく何にまれ、女子の道にくらからず、その生立もたのもしく、人もうらやむばかりなれば、文之丞は何とぞして、古郷の父に勘當わびて、子どもの顔を見せまほし、と人を憑みてつどくに、父白翁にわびたりける。鎌倉には白翁も、惣領の文之丞が、身のいたづらから家出して、今は花洛に相應に、文學武藝の師範しつ、不自由なくくらすうへに、孫まで出来しと聞きつるが、いかなるさまに生立つや、尋ねまほしとおもふをりから、人づてにて文之丞より、わび言をいひ入れければ、白翁は、うれしさひとかたならねど、いつたん主君へ勘當と、披露せし身をたやすくは、ゆるす事もならざれば、そのうち首尾を見つくるひ、君へねがひて出入をさせ

ん、文通のみは苦しからず、又孫の金五郎は、罪なき身ゆゑさいはひに、文次郎に男子なければ、迎をつかはしこなたへ引取り、いく／＼は假名家の家名を、相續さするほどに、支度をととのへ待つべし、と返事に委細を聞くよりも、文之丞は大いによろこび、わが身の出入はかなはずとも、悴を本家へつかはすは、このうへもなき事なりと、金五郎を近くまねき、鎌くらの事くはしくかたり、日あらず迎の來るをまちて、鎌くら表へくだるべし、と聞いて金五郎は今さらに、おもひがけなく本家を繼ぐは、身の本まうといひながら、一人の親をのこしおき、そのうへ子どもの時よりして、行すゑたがひに夫婦ぞと、胸におもひしお龜にも、わかれんことの心憂苦、いまだ枕はかはさねど、何かにこゝろおくそこも、なくうちとけてにくからぬ、中なるものをうち捨てて、行くことにやとさすがまだ、おほこそだちの心には、當惑するも理なり。お龜もこの事聞きしより、心細さの案じごと、とやせんかくやと思ふうち、鎌くらより金五郎を、迎の人の著きしかば、今はわかれとなりけるかと、人目の關のしのび泣、ふさぐは女子の常ながら、いとどに胸もむすほはれ、部屋に屏風を立まはし、衣引かつぎ打臥して、なみだのひまもなくばかり。をりから障子引あけて、立まはしたる屏風のはしを、折かへしてはいる金五郎「おかめ、けふはどうだ、やつぱり氣色がわるいのか」きこふ聲におかめは目を見ひらき、にっこりわらひまくらをあげ、「ハ